

冬之部

中村俊定文庫  
文庫 18  
304  
4



人



古今集卷記

古今集

神道

相承つてあるものにして神道  
その邊へ了の終ふ神道  
一序のつり付く神道

或は一趣の時

女史乃理志輯



神楽の舞もさうさうに舞をうた

言粉

あーきまーと唱すまの子れ條の言

言京の言まー

言まー言まー言まー言まー言まー

達摩の言

達摩の言や茶湯の言もあまら

達摩の言や茶湯の言もあまら

達摩の言や茶湯の言もあまら

達摩の言や茶湯の言もあまら

十言

念師を言ふはえり十言の言

念師を言ふはえり十言の言

念師を言ふはえり十言の言

言

言まー言まー言まー言まー言まー

一 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山

夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山  
 夕の山 夕の山 夕の山 夕の山

夕の山

夕の山 夕の山 夕の山 夕の山

宗世の墓も志くぬやとてしる所

古代活きの塚

古代のりも 顔くさるゝ夕志を 終

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

あはれ又 冥途のき

河  
狗〜〜ゆりりれハ

時多ふらねを〜〜あき〜

訪向の座中風松きふたありつらつらの  
ちき世うりりり地をすたりたうまうは  
せあふらさねや念のふら路向のぬら  
旅りの程もさくまう〜るあ〜

部〜や〜何〜海〜も〜ら〜り〜時〜

東武電客のりうらひ通きふや〜

あ〜ら〜の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

あ〜ら〜の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

時多ふら〜自〜行〜り〜ま〜り〜の〜宿

宿〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

さ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

時多の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

今〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

時多

さ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

お命満

お令り傳や隣りの梅も後々らん

神一のるを

あうらもく 経堂のむのるく 神一のるを  
あうらもく 経堂のむのるく 神一のるを  
あうらもく 経堂のむのるく 神一のるを  
あうらもく 経堂のむのるく 神一のるを  
あうらもく 経堂のむのるく 神一のるを  
あうらもく 経堂のむのるく 神一のるを

小室のるを

神一のるを ねえんより 経堂のるを

修務橋のるを

春をらん 梅や 神一のるを

あ指

あうらもく ねえんより 吹流し  
あうらもく やあめを 伝はく 経堂のるを  
あうらもく 梅や折く 経堂のるを  
あうらもく 梅のうら 梅のるを



大伴年塚うく

本うりのつ年とくうー世のうく

十塚のつうく

風や 猪ー 海成 海さね

五折のあー 群も 三よりー又

群もー 群もー 群もー 群もー

群もー 群もー

群もー 群もー 群もー 群もー

群もー 群もー 群もー 群もー

群もー 群もー 群もー 群もー

群もー 群もー 群もー 群もー

群もー

群もー 群もー 群もー 群もー

巴結のぬー 三年のまねをゆ

群もー 群もー 群もー 群もー

群もー 群もー 群もー 群もー

此の所をあらわす

船のつらき事や ねむりおきてん

ふしとてゆくの事とハ見れり  
ぬえんうら

掃き立海一ここの所の事よの事

白浪の波は舟の圓がまゝ  
二つの事よの事

あの舟のつらきも 圓が波のつらき

白浪の波は舟の圓がまゝ  
二つの事よの事

道高やまのよの舟をくらととも

ふはりの舟のつらきハ事よの事  
ゆりの舟のつらきハ事よの事  
のやまは舟のつらきハ事よの事  
二つの事よの事

ちまねとつらきハ舟のつらき

東の舟のつらき

舟のつらきハ舟のつらき

舟のつらき

舟のつらきハ舟のつらき

三川の舟のつらき

舟のつらき

ちりりよの葉 孫くくくくや海の子

公卿権現を序す

彩鈴の音のふとやちりりよの葉

ちりりよの葉のふとやちりりよの葉  
ちりりよの葉のふとやちりりよの葉

りんりんよの葉のふとやちりりよの葉

梅真まき 御序

魂を撫さくくくくよの葉のふとやちりりよの葉

ちりりよの葉のふとやちりりよの葉

仍仍の葉のふとやちりりよの葉

辛卯年小町の夜

ちりりよの葉のふとやちりりよの葉

ちりりよの葉のふとやちりりよの葉

ちりりよの葉のふとやちりりよの葉

歌 柳中 草紙

ちりりよの葉のふとやちりりよの葉

ちりりよの葉のふとやちりりよの葉



焼くはうく

草折や 晴し 曇る 又く 焼く 作

鎌倉へ 越る 時の 候

茶の 味 折ね ちの ぬる 湯うす

徳宗

徳宗や ぬる 湯ふ ぬる 湯

折ね ぬる 湯ふ ぬる 湯

茶の花

茶の 花 や ぬる 湯と ちり ぬる 湯

茶の 花 や ぬる 湯と ちり ぬる 湯

十の 月の 茶の 花 や ぬる 湯の 茶の 花

茶の 花 や ぬる 湯の 花 や ぬる 湯

茶の 花 や ぬる 湯の 花 や ぬる 湯

茶の 花 や ぬる 湯の 花 や ぬる 湯

茶の 花 や ぬる 湯の 花 や ぬる 湯

茶の 花 や ぬる 湯の 花 や ぬる 湯

花

上

はなはな科はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科はなはな科

はなはな科はなはな科

花

り松の箱に〜は〜〜海に

は〜〜〜〜

ゆ〜〜りの海〜〜

松

平〜〜里やよ〜〜

〜〜〜

新〜〜し〜〜

若川

若川や〜〜

〜〜〜

あ〜〜の世に〜〜

〜〜〜

折〜〜成〜〜

〜〜

本〜〜ふ〜〜折〜〜

〜〜折〜〜

~~~~~の湯ふけ——を牡丹

大根川

おぼろ〜さり〜ん 大根川

幾〜編〜 大根川

相撲〜の年〜 大根川

け〜川〜 大根川

〜旗〜 大根川

ま〜の〜 大根川

大根川

ろ旗の〜 大根川

〜の〜 大根川

大根川

〜の〜 大根川

近〜の〜 大根川

大根川

〜の〜 大根川



寂ろろ人々をうつしんる大程の  
無事なくくすぬくあるらん  
夜なりし七題の大程の歌う那  
寂ろ何と程一とくろこくろ  
うろろろろろろろろろろろろ

一花のりりりりりりりりりりりり

埋入

埋入りやこく程もく程えんり程のそら  
埋入りやあまもあまの 早もろ思  
埋入りやあまもあまののちろろろろ

埋入り 白くあまもあまのちろろ

埋入りの周程あまのちろろろろの那

埋入

埋入りやあまのちろろのちろろま  
埋入りやあまのちろろのちろろ



水う〜〜〜

新井の宮子殿の御書

あさ〜〜〜

比田の宮子殿の御書

あさ〜〜〜

後所不通ふあさハ次子の家を〜  
せう介仲ふ〜  
旅人のあさを破る〜

夜〜〜〜

野〜〜〜

野〜〜〜

あさ〜〜〜

あさ〜〜〜

鶴

あさ〜〜〜

あさ〜〜〜

あさ〜〜〜

浮石品もきつとあつたにんじゆ

柳のよさを清くもくきりたつたの

水きり

うきや人れ少きをふくむ

水きりにはおほはきつらん帆掛舟

あきの好観ふくくり端田川

あきの

あきのあきや清のちくくあつた

あきのあきのあきのあきのあきの

清くもくきつとあつたにんじゆ

あきの七里く清くおほく清

あきのあき

あきのあきのあきのあきのあきの

あきのあきのあきのあきのあきの

あきのあきのあきのあきのあきの

あきのあきのあきのあきのあきの

細介守

まわりのやまをたぬ者の網代ち

小春

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

おぼろのさくしんしんしんしんしんしん

長崎支那の物店に於て門下生を  
得たるものありしを記す

本町の店に於て少くもを記す

後の所存を記す

風をよめりて花をよめりて

花をよめりて月をよめりて

月をよめりて星をよめりて

星をよめりて雲をよめりて

雲をよめりて空をよめりて

後記

少くも二の成りて少くも

少くも

少くも二の成りて少くも

少くも二の成りて少くも

少くも二の成りて少くも

少くも二の成りて少くも

少くも二の成りて少くも

吉田色牛きりあふ

後橋一善士のむらり少き日

其後吉田の善報がききよきりあふ

吹きあがりききよき井のぬや少き日

後橋一善士のむらり

後橋一善士のむらり少き日

後橋一善士のむらり

後橋一善士のむらり少き日

吉田色牛

所へとらぬききよき井のぬや少き日

吉田色牛

十りの橋一善士のむらり少き日

十日の橋一善士のむらり少き日

後橋一善士のむらり少き日

十りの橋一善士のむらり少き日

吉田色牛

十のりや 雑わ ぬぬ 葉のむ

さゆりや 雲

十日や 雑を ねさりの 葉一つ

あわ村を 雲を ねさりの 葉を 体

十日や ねさりの 葉を ねさりの 葉

あわ村の 雲を ねさりの 葉を 体

十日のりや 雑わ ぬぬ 葉のむ

あわ村の 雲を ねさりの 葉を 体

十日のりや 雑わ ぬぬ 葉のむ

あわ村の 雲を ねさりの 葉を 体

十日のりや 雑わ ぬぬ 葉のむ

あわ村の 雲を ねさりの 葉を 体

十日のりや 雑わ ぬぬ 葉のむ

あわ村の 雲を ねさりの 葉を 体

十日のりや 雑わ ぬぬ 葉のむ

あわ村の 雲を ねさりの 葉を 体



十のりや沖の波をのち并川

とてぬの白あつきのわをいふあ〜

十日や青のまゝ ころあふ一しや

一 柿をのきききとふ

十日春色道をとま〜らる〜

後

十のりのまゝあ〜る〜 櫻のむ

そのられや きてはるひや

そのりれ 海へ 海へ 海田の橋

そのりや 吹雪を〜 ね〜 風の橋

道にぬきのり 冬初風のそよ風  
まはる〜

そのりや 春のあけ 思ふよりのあこ

路をれ月 みるの物

於あ〜 ころあふ〜 みる乃月

物〜 ころあふ〜 みる乃月

路を〜 梅 みる乃月

ゆきうららりりゆきうららりゆきうららり

うけうの眺

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆき

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ちげのうららりゆきうららり

ゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆきうららりゆきうららりゆきうららり

ゆき

ゆき

と書ねし中しをれし風物も  
一様しむ

世成る所とん終ん寺のありは

示ふ形一様也

みる物に意れりるをむらる

え製ふ言ひり

みる毫海うらハ後めくおま

半夕雲一圓を

むの産れ時空をりる一みる

海井、親母の巻

一物もなくまらぬの世に

りり一能者親母の二つを

花の親をとりとせねるを接

岩川系中候

今席のねり縁らやをうま

ねく呂柱をよまると

ねり果ふれらる目か殿一みる接

推五ま〜まの〜ぬ〜

店に〜くつろぎを席風やを梅

竹保う新巻をいほふ

あもそく座も〜るらるる〜ぬ〜

東遊千千亭常盤屋新巻  
うき巻をいほふ

夕遊のしも目〜〜〜ぬ〜

目の新巻〜遊程のぬ〜  
るら

菓のむち〜〜ぬ〜梅

小田原あ〜

外席のありひや菓のぬ〜ぬ〜

菓のぬ〜

菓のぬ〜やあ〜も〜ぬ〜

菓のぬ〜や白〜のぬ〜ぬ〜

細〜

世にふ〜ぬ〜ぬ〜細〜

細〜〜〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜



けはきもあはれあつたさうの涙あふ  
涙あふさうくくくくくくくくく  
書かすくくくくくくくくくくく  
情面を混へて泣くくくくくくく  
さうの涙あふさうくくく

探水初めを述べく世にふさふさ  
をばくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく

おのころは涙あふくくくくくく

今更

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

妻はくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

改中

併に其も亦し〜亦多路中〜の邦  
何多時も感ふも亦多路中〜  
〜のハ〜も亦多路中〜  
〜の事と亦多路中〜の事

其の路中〜

路中〜の事と亦多路中〜の事

甲〜

〜の路中〜の事と亦多路中〜の事

其の路中〜の事と亦多路中〜の事

〜の路中〜の事と亦多路中〜の事

其の路中〜

〜の路中〜の事と亦多路中〜の事

甲〜

〜の路中〜の事と亦多路中〜の事

甲〜

〜の路中〜の事と亦多路中〜の事

〜の路中〜の事と亦多路中〜の事

まゝの御心持に御座りて

今一々の御心持を御座りて  
古人の御心持の御座りて  
御座りて御心持の御座りて  
御座りて御心持の御座りて  
御座りて御心持の御座りて  
御座りて御心持の御座りて

御座りて御心持の御座りて

御座り

御座りて御心持の御座りて

御座り

御座りて御心持の御座りて

御座りて御心持の御座りて

御座りて御心持の御座りて

御座り

御座りて御心持の御座りて

御座りて御心持の御座りて

御座りて御心持の御座りて

御座りて御心持の御座りて

御座りて御心持の御座りて

御座り

御座り

昔年やうしんかち行はる  
 けしきもさるやうなぬらうなりの時  
 書いぬるもやぬくも所なく  
 居る言地りか一もかしくは  
 野の原つくりやけしきも  
 けしきもぬのさるもぬのさる  
 ぬけしきもぬのさるもぬのさる  
 善のもけしきもぬのさるもぬのさる

いぬしんかち行はるのさるもぬのさる

それさるぬのさるのさるもぬのさる

さるもぬのさるのさるもぬのさる

ぬのさるのさるもぬのさる

牛のさるぬのさるもぬのさる

作ぬのさるぬのさるのさるもぬのさる

いぬしんかち行はるのさるもぬのさる

ぬのさるのさるもぬのさるのさるもぬのさる



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

りあ~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

巴東の海客を新す

くもるもさゆりさゆりゆき

接ぎのりさゆり

くもるもさゆりさゆりゆき

四年のりさゆり

くもるもさゆりさゆりゆき

海客のりさゆり

海客のりさゆりさゆりゆき

新す葉

くもるもさゆりさゆりゆき

くもるもさゆりさゆりゆき

海客のりさゆり

くもるもさゆりさゆりゆき

くもるもさゆりさゆりゆき

くもるもさゆりさゆりゆき

くもるもさゆりさゆりゆき

さしやうらんやんはなふふ

後集 四巻

白梅をまきしり 梅のまきしり多  
あつたのまきしりや梅乃まき多  
丁のゆもはきまきまのしりらんが  
あつたしりまきの柳やのみ年

歌集 新

あつたしりまきの柳やのみ年

白梅の中しり 梅まきやまきしり  
あつたしりまきの柳や梅乃細  
風をまきしりまきのまきしり  
まきのまきのまきしりしりまきのまき  
まきのまきのまきしりしりまきのまき  
あつたしりまきの柳やのみ年  
あつたしりまきの柳やのみ年  
あつたしりまきの柳やのみ年

あつたしりまきの柳やのみ年

歌集

三十一

らふさう

ま〜ゆきや〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

ま〜ゆきや〜り〜

ま〜ゆきや〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

白ゆきや〜り〜

代〜る〜ゆき〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

雪のふゆのふゆのふゆ  
雪のふゆのふゆのふゆ  
雪のふゆのふゆのふゆ  
雪のふゆのふゆのふゆ

新雪や〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

新雪 三葉

一陽のよきや〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

り〜る〜ゆき〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

ま〜ゆきや〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

ら〜る〜ゆき〜り〜る〜

ま〜ゆきや〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

ら〜る〜ゆき〜り〜る〜

ま〜ゆきや〜り〜る〜雪のふゆのふゆ

六冬

三十一

洛山の小河場

洛山の小河場  
好くもさるる折居

三好寺の少名もありしつらき

うねりかきんかきまわりのみ

高ふり

高ふり  
高ふり

色は

色は  
色は

神楽川の

神楽川の  
高ふり

高ふり

高ふり  
高ふり

高ふり

高ふり  
高ふり

高ふり

高ふり  
高ふり

九里名留ふ

霜のふりしるはゆきとてはなれぬ

雪のふりしるはゆきとてはなれぬ  
雪のふりしるはゆきとてはなれぬ

雪のふりしるはゆきとてはなれぬ

水色

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

水色はあけぬ

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

さきさきや 何とぞかしの侍もな家  
さきさきや 何とぞかしの侍もな家  
さきさきや 何とぞかしの侍もな家  
さきさきや 何とぞかしの侍もな家

初巻

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

二巻

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

三巻

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

さきさきや 何とぞかしの侍もな家

さきさきや 何とぞかしの侍もな家



一の付くものぬきしらや指しを

紙水 水指

紙編のすきぬきやうの紙  
のき糸 水 筆 筆 筆 筆 筆  
多筆筆筆。油 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
水 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆

紙水

筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆

紙水

筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆  
筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆 筆

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

一休

一休の 妙の 妙の 妙の 妙の 妙の

船のりま推し子歌

少推くまふ刀船のりまを

解舟の音

舟のりまおはる

七里の波

舟のりまあはる

遠州化

舟のりま化あはる

遠三の像

舟のりまあはる

舟のりまあはる

舟歌

舟のりまあはる

舟のりまあはる

舟のりまあはる

舟歌

舟のりまあはる

後編一

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

統八

統八や著一自鼻のおのころ

統八や著一自鼻のおのころ

統八や著一自鼻のおのころ

業名

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

おのころやまゝ一海ふし編

一

一

白梅の香をよめるはさうし梅の香

うきうき梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

さうし梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅の香をよめるはさうし梅の香

梅

梅

多分相の方をも今も巴牛の内ふ  
書りゆく旅人の心をわらわす

年の梅の影 夜更けの中 旅の志は

柳の影の如く 花の影の如く  
花の影の如く

お木のちりしゆく けりしゆく けりしゆく

あふ

とてあはれ 梅の影の如く けりしゆく

あふ

けりしゆく けりしゆく けりしゆく

さうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう

梅の影の如く けりしゆく

さうさうさうさうさうさうさう

年の梅の影 けりしゆく

あふ

梅の影の如く けりしゆく

さうさうさうさうさうさうさう

梅の影の如く けりしゆく

すまじき心なすれ中う初ま四巻

お作の心と作をいすすすす

五列の巴様よりひきおの格置のまら  
をさすれりらんを初まうま四巻

格置の心と作をいすすす

格置の心と作をいすすす

すまじき心なすれ中う初ま四巻

すまじき心なすれ中う初ま四巻

お作の心と作をいすすす

四巻の年の初ま人の難い心なすれ  
此まの格置の心と作をいすすす

お作の心と作をいすすす

お作の心と作をいすすす

お作の心と作をいすすす

お作の心と作をいすすす

お作の心と作をいすすす

お作の心と作をいすすす

お作の心と作をいすすす

六  
この山

この山は———

いかに

春の山は———

あけの山は———

あけの山は———

いかに

春の山は———

あけの山は———

あけの山は———

いかに

春の山は———

あけの山は———

いかに

春の山は———

あけの山は———

いかに

あけの山は———



り年のはやくはるまゝと云れり  
 ありきのまゝに侍り竹の若  
 柳〜〜〜のたけり  
 竹葉のまゝにまゝの侍り  
 流くまゝにまゝにれり  
 し〜〜〜のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り

柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り  
 柳葉のまゝにまゝの侍り

おきりくちのりや成をくく入りくね

四十七

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

年のくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね

おきりくちのりや成をくく入りくね



字體の勢多し一柳をいれしを宗女  
 をいふふ呼りし奉承成るるありは  
 一をををたるはははははははははは  
 中にも折信一今もいもいもいも  
 折もいもいもいもいもいもいも  
 くれは信一今もいもいもいもいも  
 今もいもいもいもいもいもいも  
 と折田の信一今もいもいもいも  
 日一や一折田と今もいもいも  
 宗一いもいもいもいもいもいも  
 宗女殿の折信を今もいもいも  
 ことなるなううううううううう  
 けり

年志れまゝの代ふ平路まら塔

宗女殿の折信を今もいもいも  
 ことなるなううううううううう

柳うも乃はははははははははは

涼しはははははははははははは

あまらうらたのあまらうらた

折信やうらたのあまらうらた

折の勢

折の勢多し一柳をいれしを宗女

春風の音や 花の匂い けしき

修習齋をいふはれしき

いよよ 花の匂い けしき

田舎の音 けしき

ふしの音 けしき

千代田の音 けしき

中へい けしき

尾花の音 けしき

花の音 けしき

花中の音

花は けしき

花の音 けしき

花の音 けしき

花世

花の音 けしき

ち〜尾集巻四終

註

風雅の名き毛詩より之を誦讀此  
神ハ古今の都より定するの考  
加波竹花より今地を風雅に託し  
初由か御説に存きよ早急の如き  
暈く今世の秋し葉びか良辰  
美景子わたりよりハ鏗詠をまよせ

はく祇善色をそとてりて免て、  
光彩の沫補びし義白吐ぬ  
又あり貨何事虚安じ實おれ  
或をたつし丸わの宿しく変化  
有立とついに此時今との遺行は  
詞原は弱ししし難物のは  
奈く免事此はいえらるるの  
おの言

うく措く中へ終極の言はけり  
美子親有言の言方此より  
かいは市信措を全部おき  
こらぬあはくを此お永く借  
格葉の陰ぬておわく南  
松花北色の中廻りては  
好士吾曉終夕のおる

たふさのしめとふ羅蘇乎

寛延二己巳年夏五月

湘荊客

肥壯



皇都書社

井筒屋在書

返



